

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

令和5年度がん研有明病院大腸外科での国内外科研修を終えて

金沢医科大学一般・消化器外科

橋本 明史

卒後7年目の消化器外科医で外科専門医を取ったばかりの身ではありますが、幸運にも令和5年度日本臨床外科学会の国内外科研修プログラムで、がん研有明病院大腸外科での1カ月の研修という貴重な機会を頂き、多くの学びと成長を得ることができました。

がん研有明病院では大腸外科はスタッフ6名、1年目から3年目までのレジデント10名で構成されており、その中で精緻な手術技術だけでなく、高いプロフェッショナルリズムと研鑽の姿勢が共有され、熱意あるレジデント同士が切磋琢磨できる環境であることを体感しました。

手術に関しては月曜から金曜まで連日多数行っており、その一部ではありますが、私は4週間の間に45症例の手術を見学させていただきました。そのほとんどが腹腔鏡やロボット支援下手術で、大腸領域で行われる様々な手術が網羅されており、ISR（直腸内視鏡手術）・APR（会陰部切除術）・TPE（全骨盤切除術）、側方郭清などの比較的頻度の低い定型手術も短期間で集中的に見学することができました。これにより、骨盤解剖の理解を飛躍的に深めることができましたと感じています。

高名なスタッフの精緻な手術技術に触れられることはもちろんですが、高い意識を持って研鑽を積んでいるレジデントに対する指導の様子もまた、良い勉強になりました。さらに、稀な困難症例に対する拡大手術も経験させていただきました。詳細な術前画像評価から各々の症例に対して緻密な戦略を立てて手術に挑む姿勢は徹底されており、また、このような高難度症例ではそれでもなお術中困難な場面に遭遇するものですが、突破力とでも言うべき臨機応変な対応力の高さに感銘を受けました。

がん研有明病院では、スタッフ間で同じ術式でもアプローチの仕方が異なる場合があり、多様な手技が行われていますが、それぞれがしっかりと定型化されており、高品質な医療が提供されています。自施設での修練だけでは触れられない多様な術式に触れられると考えたのが、私がかん研有明病院を研修先に選んだ大きな理由の一つでした。スタッフからは手技のポイントについての貴重な指導を受けられ、これは外科医として成長するために非常に有益であると感じました。手技の定型化は非常に重要なのは周知のことではありますが、修練期間中にこのように様々な手法に触れることで外科医としての引き出しを多く持つこともまた重要であり、定型化だけでは対応できない症例での応用力に直結するものだと感じました。

ロボット支援下手術においても多くの学びを得ることができました。近年急速に普及してきている領域ではありますが、それゆえポート配置など施設間でも細かな違いが多く、様々な報告がされています。通常直腸癌だけでなく脾彎曲授動を要する症例や、結腸癌に対するロボット支援下手術を助手の動き方も含めて見学できたことは有意義でした。

手術以外の側面では、カンファレンスでの症例検討の議論のクオリティの高さには驚かされました。レジデントの先生は症例の要点をパワーポイント1枚から2枚程度に簡潔に要約し、流暢に英語でプレゼンテーションしていました。問題症例ではその症例個別の議論にとどまらず、文献的なデータや、がん研有明病院での過去の診療データを踏まえた議論がなされており、多数の手術をこなすだけでなく自施設の診療実績を常に自らが厳しい視点で評価しつつ日々の診療を行っていることが良く分かりました。がん研有明病院は、ご存知の通り臨床試験にも積極的に参加しています。週一度の他施設とのWebカン

ファレンスでは、進行中の臨床試験に登録された症例について1例1例詳細な議論が行われており、大いに刺激を受けました。

当初、十分な期間だと思っていた4週間は充実した研修期間を過ごす中で瞬く間に過ぎ去ってしまいました。このような稀有な機会を与えてくださった日本臨床外科学会の万代会長、国内外科研修委員会の高山委員長並びに関係者の皆様、受け入れていただいたがん研有明病院の佐野病院長、大腸外科の福長部長をはじめとしたスタッフの皆様、短期間ながらも仲間の一員として受け入れてくれたレジデントの皆様に心から感謝申し上げます。